

大妻同窓生の戦争体験聞き取り調査と自分史の研究

A Study about Interview Method on War Experiences and Life History

炭谷 晃男¹, 三浦 元博¹, 前納 弘武¹, 荒井 芳廣²

¹社会情報学部社会情報学学科, ²人間関係学部人間関係学科

キーワード: 大妻同窓生, 戦争体験, life history, 実証型と合意形成型, 聞き取り調査

1. 研究の目的

「ライフヒストリー」とは、ある特定の個人によって語られた、あるいは書かれた資料、すなわちインタビューや自伝、日記などをテキストとして、個人の経験や生涯を再構成しようとする手法である。

「焼け跡で卒業式」と題された東京大空襲で校舎が全焼したため、その焼け跡での卒業式の写真が本研究の出発点でした。当時、大妻コタカ先生や大妻生たちは、何を考え、何を目指していたのか、誠に心打つ写真でした。

多くの犠牲を払った先の戦争の勃発からちょうど70年が経過した。戦争体験について直接聞き取りをする最後の機会と言っても過言ではない。今こそ、大妻生たちにとっての戦争体験の意味を問い直し、現在の学生たちにとって、生きること、学ぶことについて、同窓生から学ぶ貴重な機会と考えた。

2. 活動実施報告

大妻コタカ記念会の協力を得て戦争体験をされた卒業生をご紹介いただき、インタビュー調査を実施した。

研究手法としては、昨年度がグループインタビューであったのに対して、今年度研究は個別インタビューを主とした。3ケース試みたが、2名の方については昨年度インタビューの追調査。1名の方は初めてお話をうかがった。

①5月11日 (Yさん/S2年生) 昭和15年に大妻高女に入学。四年の課程を修了し、昭和19年大妻の専門に進学。専門部に在籍中に第二次世界大戦が激化。大妻の学生時代の生活や勤労奉仕など戦争体験をうかがった。

②5月23日 (Tさん/S5年生) 昭和17年4月に大妻高等女学校に入学、その後は大妻女子専門学校の経済科を卒業し、25年に大妻に事務員として

就職する。戦争体験と大妻コタカ先生の思い出を語られた。

③11月26日 竹内淳子女史 終戦の翌年に大妻を卒業。その後大妻コタカ先生の秘書など事務のお手伝いをされて、公職追放にあわれるまでの大妻先生のご様子を知る数少ない方である。

竹内さんは昭和18年に女子専門学校に入学。工場や造幣局に勤労奉仕に行っていた。当時の学生達には悲壮感や強制感はありませんでした。

竹内さんは調理実習で、おひたしを入れろという指示はなかったが、神保町の安い定食屋で買ってきたおひたしを料理に加えた。調理実習の先生はそれを咎めることはなく、むしろ褒めてくれた。大妻は独自の発想を大切にしている学校であり、個人の自立を目指している学校であることが、この時竹内さんは感じた。学校生活の一コマを語った。

大妻コタカ先生は大変包容力のある母親という印象だったが、先生としての品格と威厳があり、先生が廊下を歩くとそこが静かになった。校訓の「恥を知れ」は人間として品行校正であれという意味で、花嫁としてではなく一人の人間として自立しなければならないというものだった。教職追放された時は「私は何も悪いことをしていないのに学校を出ていかなければならない」と目に涙を浮かべて語った。学生たちと会えないことを一番悲しんでおられた。先生の涙する姿はこのときはじめてみたと言われた。

3. 研究目標の達成状況

ライフヒストリー研究には幾つかのレベルと要素を考慮しなければならないことが確認された。

まず第一に個人的体験というレベルである。個々の方が語るのは個人的な体験である。事実、真実ではなく個人によって解釈された個人的体験なのである。その意味で、第三者にとっては、検

証不可能な世界である。そこで検証されることは、その人の体験をその人がそのように語るの、その人の置かれた環境や立場、性格、記憶等々からその体験をそのように語る妥当性を理解することにある。

第二のレベルは、ダイアログという相互作用である。自分史という個人史とインタビュー手法を伴うライフストーリー研究との差異もこの点が大き。語りは語り手と聞き手のダイアログである。語り手は聞き手によって語り方が語ることには多くの事例が示している。それとは反対に、聞き手も語り手によって影響を受けていることは忘れてはならない。

第三のレベルは、文化、社会レベルである。「当時はそれが普通だった」とか「当時の人はみなそう思った」という語りである。パラダイムないし時代制約的視座とでもいうべきものである。

第四のレベルとしては時間である。時間はこれまで述べた三つのレベルを貫通するものである。個人的な体験も時間の経過とともにさまざまな要因から誇張、消失、変容することになる。数多くの対話を通じて変容もし、時代のパラダイム変化に伴って語りの内容も変容していくことがみとめられる。

また、ライフストーリー研究には「実証に至る語り」と「合意にいたる語り」の2種類があるのではない。つまり、「実証型」と「合意形成型」のライフストーリーの2つの型があるという問題提起を松本祐一氏（多摩大学総合研究所准教授）、中庭光彦氏（多摩大学総合研究所准教授）より頂きました。（2010年9月21日（火）公開講座「ライフストーリー研究の方法と課題」：社会情報学部会議室）この区分から言うならば、私たちの研究は「合意形成型」である。語るもの（大妻OG）と聞き手（現役大妻生）とのダイアログを通じて、戦争体験の持つ意味と、大妻コタカ先生の教えと人間性に触れることが出来た。

4. まとめと今後の課題

本研究の対象としている戦争体験の聞き取りという研究には幾つかの困難な事柄が存在をしていた。一つは冒頭にも述べた戦争体験をもっておられる方が少なくなっているという状況がある。さらには、その戦争体験と言うことについても、その体験の解釈に対しては人さまざまであること。

前線の兵士といわゆる銃後の人たちとではその体験や想いは異なることはいうまでもない。また、体験したことが極限状況であればあるほど、人は語ることを避ける、ないしは脚色を加える。

戦争体験といういわば極限状況について語ることは、いくら年月を経たとしても難しい課題が山積している。このことは、東日本大震災の被災者の場合についても同様である。しかし、困難な状況を人々はどうか捉えて、必死に生きてきたかを、現役の女子大生がインタビュアーとなり、大妻のOGの皆さんに語って頂いたことは、とても大きなインパクトを現役大妻生に与えることができたことは幸でした。

5. 研究成果

本研究の成果は学生の教育と卒業研究として以下の研究に結実をしている。

[1]片岡晴香「戦中戦後を生きた二人の女性～大妻コタカと平塚雷鳥～」大妻女子大学社会情報学部社会情報学科卒業研究 2012。

[2]着本智代「戦時中の大妻ファッションを探る～服飾から見る時代背景～」社会情報学部社会情報学科卒業研究 2012。

[3]吉成 彩「戦時中の大妻の学習カリキュラム～ある女学生の一日を再現する～」社会情報学部社会情報学科卒業研究 2012。

[4]吉成 幸「ペンをミシンに～大妻女子学生と勤労働員～埋もれた記憶を掘り起こす～」大妻女子大学社会情報学部社会情報学科卒業研究 2012。

[5]「同窓生の戦争体験インタビュー記録 2010」2010年9月4日。

[6]公開講座記録「ライフストーリー研究の方法と課題」2010年9月21日。

[7]「同窓生の戦争体験インタビュー記録 2011」。

謝辞

本研究プロジェクトに惜しみない協力と支援を頂きました大妻コタカ記念会に謝辞を述べたい。また、本研究のために学生の質問にお答え頂いた大妻の諸先輩にお礼を申し上げます。最後に、共同研究者として本研究プロジェクトに参加してもらった学生たちに感謝の意を表したい。三浦ゼミ：片岡晴香、着本智代、吉成彩、吉成幸、炭谷ゼミ：芹澤真央、田中亜紀、古田涼子